
悲しい部員とわからず屋

風車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲しい部員とわからず屋

【著者名】

NZマーク

【作者名】
風車

【あらすじ】

時は金なりって言つけれど、確かに時間を無駄にするのは良くないと思つ……。

時間は前にしか流れない。取り戻すことはできないんだ……。
だから、時間を無駄にしないためにも、常に早め早めに行動して
いた。でも、一つだけ僕にはできないことがあった。
それは、退部をすることだった……。

「え？ ちょっと待てよ。辞める？」

あだちはまか
足立悠が僕に聞き返した。

「ああ。そうだ。もう、あの部活を続ける意味が見出だせなくなっ
たからな」

そう。私立の中高一貫校の学校に通っているせいで三年も無駄に
あの部活に捧げてしまった。

中学一年生のとき、頑張つて練習すれば一年生でレギュラーにな
れると思って一生懸命やった。しかし、僕が一年生になったとき、
顧問は僕らの一つ下の代つまり、新一年生をレギュラーにして、
僕の一年間の練習時間を無駄にした。

たしかに、新一年生は強かった。でも、だからといって僕らの学
年の半分以上をレギュラーから切ることはないじゃないか。いや、
それをやるなら、むしろ全員を切つて欲しかった。僅かな希望さえ
も断ち切つてくれればよかつた。僅かな希望があつたから、僕は今
までの努力を無駄にしないように頑張つた。頑張つてしまつた……。
「僕ももつ、高一だ。これ以上やつて何になる？ いっそ、ここで
スペツと辞めてしまった方が残りの高校生活を楽しめそうだ」

無駄にしたくない。たつた一度の高校生活。楽しまなくて何にな
る？ ただでさえ、男子校なのに……。もう、既に半分くらいの青春
を失つているのに……。

「まあ、それもそうだよね。でもさ、本当に諦めるの？」

「ああ。そのつもりだ」

「じゃあ、ショウの……橋利翔太^{はしりじょうた}の部員としての今までの努力はどうなるんだよ」

「だったら、逆に聞くが、このまま続けて何も起きなかつたら、それこそ、その間の努力はどうなる?」

悠は黙つてしまつた。

「僕は時間を無駄にしたくないだけなんだ」

「オレは……」

悠が呟く。

「ショウのボールを追つかけてる姿が大好きだつた」

「……………『ごめん』」

悠と話していく、僕は部活を辞める決心がついた。僕はきっと、最後に誰かに引き留められたかったのだと思う。

だから……ありがとう、悠。僕を引き留めてくれたのは君だけだ。退部届を先生に提出するために、僕は教室を出ようとしました。

「なあ、ショウ」

悠に声をかけられた。その声は心なしか少し震えている気がした。

「なんで、時間つて前にしか進まないんだと思つ?」

「急に何だよ」

「オレはこう思うんだ。流れた時を惜しむため。無駄にした時間を、過ごした時間を振り返るため。そのためには、時間は進んでいる。本当に時間を無駄にしたくないなら、自殺するべきだと思つ。だって、生きていることそれ自体が時間を浪費する原因なんだから」

悠の真剣な声を聞いて、僕は悠の方に向き直つた。

「時間なんて、死ぬまであるんだぜ? その中のほんの一、二年無駄にしたところで、どうつてことないよ」

悠は笑つた。見るとこっちが安心しそうな顔で。

「死ぬまで……か。たしかにそうかもな」

きつと、いつも言つている僕も笑つてゐるのだらう。

悠。彼の言葉は不思議だ。何でも正しこじとを言つてこゐるよつて聞こえる。

「悠……ありがとう」

そう言い残して、僕は教室を後にした。

『無駄にしたところで、どうしたことないよ』、か。

僕は手に持った退部届を鞄にしました。

「もう少し、無駄にしたつていいかもな……」

僕は誰に言つてもなく独りで呟き、下駄箱へと向かうのだった。

ショウが出ていった後、オレはある場所に向かっていた。

「なんとか引き留められたみたいだね。これでいいんでしょう？ 君たち」

「はい、ありがとうございます、足立先輩」

「橋利先輩が辞めちゃうと、僕たち凄く困るんです」

ショウのテニス部の後輩たちが口々に言つた。

ここはテニス部の部室。オレはショウの後輩たちに橋利先輩が退部しそうだから止めてくれと頼またのだった。

「フフシ、ショウも愛されてるな。後輩たちにここまで、辞めないでつて思われてるんだから」

ショウの後輩たちはニコニコと笑いながら言つた。

「そうですね。あんなにいい先輩は他にはいませんよ
なんで、ショウはこんないい後輩たちに恵まれているのに辞めようとするんだろ?」

「せんぱーい、球拾ってください」

「お、おう」

テニスコートに転がるボールたち。それらを拾う僕たち。そして、それを突っ立つて見ている後輩たち。少し馬鹿にしたような一ヤケ顔がムカつく。

やっぱり……無駄なんじやないかな。

「パシリ先輩。こっちもお願ひします」

「おー！ お前、今、パシリって言つたやー！」

「言つてませーん」

やつぱり……辞める。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8143q/>

悲しい部員とわからず屋

2011年10月7日13時25分発行